

## Strike-slip olistostromal Basin ?

—秩父帯”付加コンプレックス”のeastward polarity—

山北 聡 (宮崎大・教育)

秩父帯 (狭義, =”秩父累帯北帯”) の先白亜系 (ただし, 最下部白亜系を含む可能性あり) は, 単純な付加体モデルによる付加コンプレックスとして考えられているようである。その形成過程には, 地帯の伸びに直交する方向の運動が主要に関与したものと考えられている。地帯の伸びに平行な運動成分は, 地帯形成後の再配列の要因としては考慮されていても, 主形成段階からは排除されている。ところが秩父帯の大構造をみると, 初生的な構造として, 地帯の伸びと平行な方向への極性が認められる。またその大構造の特徴は日本における代表的横ずれ堆積盆と考えられている和泉層群などと類似した特徴をもっている。和泉層群を例として横ずれ堆積盆の地質構造上の特徴についてまとめると次の①~⑤のようになるであろう。①全体としては片翼のみが発達した非対称な複向斜構造をなす (北翼が発達)。②褶曲軸が雁行配列する (左雁行配列)。③褶曲軸は一方向にランジする (東方にランジ)。④地帯の伸びの方向が, 大局的に地層の上下の方向になる (東側が上位)。⑤岩相境界と同時面は斜交する。

一方, 演者は先に, 四国の秩父帯の先白亜系について, その大構造と地層区分についての考えを示した (Yamakita, 1988; 山北, 1989)。秩父帯先白亜系は, 岩種組合せの違いにより, 南側に分布するコンプレックスSと北側に分布するコンプレックスNとに二分され, コンプレックスNはさらに見かけの下位より, ユニットN-1 a およびN-1 b, ユニットN-2, ユニットN-3の各ユニットに区分される。コンプレックスNとコンプレックスSとは互いに側方に漸移し, 指交関係にある。コンプレックスNの各ユニットは後述する一部の例外を除き, それぞれの内部の層理面およびスラブ境界面に平行な境界面をもって累重している。このような地層区分とあわせて, 秩父帯の大構造を見てみると, 次のような特徴をもっている。まず, 全体としては南翼に比べ北翼がよく発達し

た複向斜構造をなしている。褶曲軸はごく一部の例外を除き, すべて東方にランジしている。またそれら褶曲軸は左雁行配列を示す。コンプレックスN中の各ユニットの境界は, 大部分それぞれのユニット内部の層理面と平行であるが, ところどころで東へ行くにつれて上位側にステップ状にシフトし, 一部では累重の重複が見られる。これによって, 大局的なユニット境界のトレンド (地帯の伸びにはほぼ平行) と層理面およびスラブ境界面の方向とは斜交しているのである。以上のような地質構造のパターンは先に挙げた和泉層群のそれと非常によく似通っている。

演者は, 秩父帯の先白亜系を, 南北両側から異地性岩体の供給を受けたオリストストローム-重力滑動ナップ複合体として解釈した (Yamakita, 1986, 1988)。そしてコンプレックスNの各ユニットの違いについては, 供給された異地性岩体が時期によって異なっていたことによると考えた。このオリストストロームが集積した堆積盆が横すべり断層運動に伴って形成された, すなわち, 黒瀬川帯に沿う左横すべり断層運動に伴い, ステップ状に傾動しつつ東進しながら形成されていく堆積盆を, 順次オリストストローム-重力滑動ナップ複合体が埋積していけば, 上に述べたような秩父帯の構造が形成されるのではなかろうか。御荷鉾緑色岩類の大部分が海底地滑り堆積物であり, 形成場の一つとして海洋地殻上での断層崖下が想定されることと (Iwasaki, 1984), その御荷鉾緑色岩類と秩父帯先白亜系との境界が, コンプレックスN内の各ユニット境界とともに上記のステップ状のシフトに参加していること, また, 横ずれ堆積体と考えられている秩父帯の下部白亜系 (田代, 1985) とその基盤となっている先白亜系とが, 四国東部においては調和的な地質構造をなしており, 雁行する褶曲軸が両者の間で連続することなどもこの考えを支持しているように思われる。

(1989年夏の例会)